

鎖国の時代に商社設立 福井の産品を 海外輸出した由利公正

福 井県のあわら市と坂井市にまたがり広がっている台地、北部丘陵地。ここで、市民が中心となり、現在「あわら万博茶」の復活に取り組んでいます。

江戸時代に生産が始まったという福井のお茶。その歴史をひも解くと、一人の人物が浮かび上がってきます。それは、幕末明治に活躍した福井藩士、由利公正（当時 三岡石五郎）です。一体どのように関わっていたのでしょうか。

幕末、福井藩は他藩の例に漏れず財政が困窮していました。由利は、安政5（1858）年、藩財政の立て直しのためには外国との通商しかないと考え、熊本藩士、横井小楠

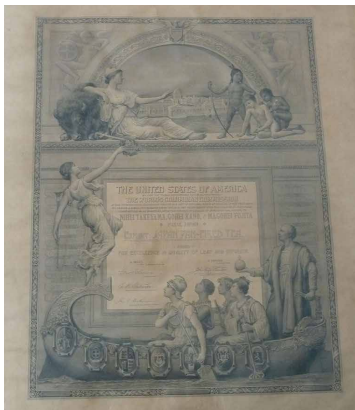
の帰国に同行して、下関で物産が集散する状況や商取引の実態を調べます。そして、翌年には長崎に行き、唐物商の小曾根乾堂の協力を得て、オランダ商館と国産の生糸・醤油などの輸出を約束することに成功します。また、波ノ平、下り松といった現在の長崎市小曾根町の港岸を埋築し越前蔵屋敷を設置したのです。

併せて、福井城下に物産総会所を設け、領内の物産集荷購入の仕組みを整えます。物産総会所とは現在の商社です。その元締めには、領内の豪農・豪商をあてました。販売ルートと輸出先の確保により、生糸や麻・醤油など福井の産品が海外に輸出されていきます。輸出は莫大な富をもたらし、一度に七万両が金蔵に入っ

たこともあり、その重みで床が抜けたともいわれています。

あわらのお茶も輸出品の一つで、輸出をきっかけに盛んに生産されるようになります。明治26（1893）年にはアメリカ・シカゴの万国博覧会で銅賞、さらに、フランス・パリの万国博覧会で金賞をとるほど海外で高い評価を得ることになります。

明治、大正に最盛期を迎えた茶園と製茶業は、昭和38（1963）年の豪雪により大損害を受けました。現在は、市内にわずかに残るお茶の



シカゴ万博で受賞した賞状（個人蔵）



シカゴ万博で受賞した銅メダル（個人蔵）

関連史料・ゆかりの地

北部丘陵地

木を使って茶の手摘み体験を実施していますが、今後、お茶を使ったスイーツなど食べるお茶としての商品開発にも取り組む予定です。



県内屈指の園芸産地。スイカ、大根、メロン等の野菜や、梨、柿等の果樹等が栽培されています。周辺には、景勝地である「東尋坊」や国定公園である海岸線、優れた泉質のあわら温泉等、年間600万人超が訪れる観光地を有しています。

【住所】あわら市二面（金津ICより車で約15分）